

1 9 5 0 s

1955	The Platters	Only You (And You Alone)	004
1956	Elvis Presley	Love Me Tender	007
1957	Sam Cooke	You Send Me	011

1 9 6 0 s

1960	The Marvelettes	Please Mr. Postman	016
1961	Ben E. King	Stand By Me	018
1962	Little Eva	The Loco-Motion	021
1963	The Ronettes	Be My Baby	023
	Paul And Paula	Hey Paula	025
	Skeeter Davis	The End Of The World	027
1964	Martha & The Vandellas	Dancing In The Street	029
	Nina Simone	Don't Let Me Be Misunderstood	031
	Mary Wells	My Guy	033
	The Animals	The House Of The Rising Sun	036
1965	The Rolling Stones	(I Can't Get No) Satisfaction	038
	The Mama's And The Papa's	California Dreamin'	040
	The Temptations	My Girl	043
	The Righteous Brothers	Unchained Melody	045
1966	Simon And Garfunkel	A Hazy Shade Of Winter	048
	The Temptations	Get Ready	050
	Sam & Dave	Hold On, I'm Comin'	052
	Four Tops	Reach Out I'll Be There	055
	Bobby Hebb	Sunny	058
	Percy Sledge	When A Man Loves A Woman	060
	Dusty Springfield	You Don't Have To Say You Love Me	062
1967	Procol Harum	A Whiter Shade Of Pale	065
	Marvin Gaye & Tammi Terrell	Ain't No Mountain High Enough	067
	Frankie Valli	Can't Take My Eyes Off You	069
	The Monkees	Daydream Believer	071
	The Young Rascals	Groovin'	073
	The Doors	Light My Fire	075
	Aretha Franklin	Respect	076
	Jefferson Airplane	Somebody To Love	079
1968	Big Brother & The Holding Company	Summertime	082
	Otis Redding	(Sittin' On The) Dock Of The Bay	085
	The Zombies	The Time Of The Season	087
	Mary Hopkin	Those Were The Days	089
	Cream	White Room	091

1969	The 5th Dimension	Aquarius/Let The Sunshine In	094
	Zager & Evans	In The Year 2525 (Exordium & Terminus)	096
	The Rascals	People Got To Be Free	098
	The Shocking Blue	Venus	101
	The Who	Tommy (album)	103

1 9 7 0 s

1970	Diana Ross	Ain't No Mountain High Enough	112
	Simon And Garfunkel	Bridge Over Troubled Water	114
	Carpenters	(They Long To Be) Close To You	117
	James Brown	Get Up I Feel Like Being A Sex Machine	118
	The Jackson 5	I Want You Back	121
	Elton John	Your Song	123
1971	The Who	Baba O'Riley	126
	Creedence Clearwater Revival	Have You Ever Seen The Rain	129
	Carole King	It's Too Late	132
	Derek And The Dominos	Layla	134
	Janis Joplin	Move Over	136
	Marvin Gaye	What's Going On	139
	James Taylor	You've Got A Friend	142
1972	Gilbert O'Sullivan	Alone Again (Naturally)	145
	Michael Jackson	Ben	147
	Harold Melvin & The Blue Notes	If You Don't Know Me By Now	149
	Albert Hammond	It Never Rains In Southern California	151
	The O'Jays	Love Train	153
	Billy Paul	Me And Mrs. Jones	155
	Lyn Collins	Think (About It)	157
1973	Roberta Flack	Killing Me Softly With His Song	160
	Marvin Gaye	Let's Get It On	162
	Stevie Wonder	Living For The City	164
	Deep Purple	Smoke On The Water	166
	Barbra Streisand	The Way We Were	167
1974	Joni Mitchell	Help Me	170
	Labelle	Lady Marmalade	172
	The Three Degrees	When Will I See You Again	174
1975	The Stylistics	Can't Give You Anything (But My Love)	177
	Olivia Newton-John	Have You Never Been Mellow	179
	10cc	I'm Not In Love	181
	Minnie Riperton	Lovin' You	183
	Bay City Rollers	Saturday Night	186
	Jigsaw	Sky High	189
	KC & The Sunshine Band	That's The Way (I Like It)	191
1976	Dorothy Moore	Misty Blue	194

	Aerosmith	Walk This Way	196
	Boz Scaggs	We're All Alone	200
	Marilyn McCoo & Billy Davis, Jr.	You Don't Have To Be A Star (To Be In My Show)	202
1977	Linda Ronstadt	Blue Bayou	205
	Eagles	Hotel California	207
	Billy Joel	Just The Way You Are	210
	Queen	We Are The Champions	213
	Debbie Boone	You Light Up My Life	215
1978	Rod Stewart	Da Ya Think I'm Sexy?	217
	Yvonne Elliman	If I Can't Have You	220
	Village People	Y.M.C.A.	222
1979	Earth, Wind & Fire With		
	The Emotions	Boogie Wonderland	225
	Blondie	Heart of Glass	227
	Donna Summer	Hot Stuff	230
	The Boomtown Rats	I Don't Like Mondays	232
	Electric Light Orchestra	Last Train To London	234
	The Knack	My Sharona	236
	Sugarhill Gang	Rapper's Delight	240
	Fleetwood Mac	Sara	242
	The Buggles	Video Killed The Radio Star	246
	The Doobie Brothers	What A Fool Believes	248

1 9 8 0 s

1980	The Clash	London Calling	252
1982	Culture Club	Do You Really Want To Hurt Me	254
	Paul McCartney & Stevie Wonder	Ebony & Ivory	257
	Daryl Hall & John Oates	Maneater	259
	Asia	Only Time Will Tell	261
	Journey	Open Arms	264
	Marvin Gaye	Sexual Healing	266
	Grandmaster Flash &		
	The Furious Five	The Message	267
	Phil Collins	You Can't Hurry Love	269
1983	The Police	Every Breath You Take	272
	Irene Cara	Flashdance... What A Feeling	273
	Cyndi Lauper	Girls Just Want To Have Fun	275
	Michael Jackson	Thriller	277
1984	Chaka Khan	I Feel For You	280
	Foreigner	I Want To Know What Love Is	283
	Madonna	Like A Virgin	286
1985	Wham!	Everything She Wants	289
	Atlantic Starr	Secret Lovers	291

	a-ha	Take On Me	294
	Eurythmics	There Must Be An Angel (Playing With My Heart)	297
1987	LL Cool J	I Need Love	299
	Rick Astley	Never Gonna Give You Up	302
1988	The Bangles	Eternal Flame	305
	Karyn White	Superwoman	307

1 9 9 0 s

1992	Boyz II Men	End Of The Road	312
	Whitney Houston	I Will Always Love You	314
1996	Eric Clapton	Change The World	318

C h r i s t m a s

1968	Otis Redding	Merry Christmas, Baby	324
1970	The Jackson 5	Give Love On Christmas Day	327
1984	Band Aid	Do They Know It's Christmas?	329
	Wham!	Last Christmas	332
1987	RUN-D.M.C.	Christmas In Hollis	336
1994	Mariah Carey	All I Want For Christmas Is You	338

C O L U M N

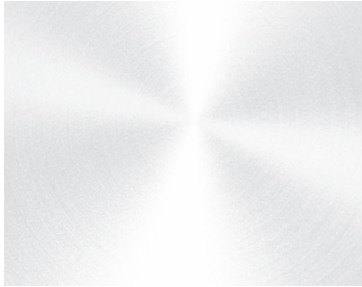
1	White Christmas	326
2	Rudolph, The Red Nosed Reindeer	328
3	I Saw Mommy Kissing Santa Claus	331
4	Silent Night	333
5	O Holy Night	335
6	Joy To The World	337
7	Amazing Grace	340

コ ラ ム 一 覧

キリスト教と聖書	018
公民権運動	031
ブリティッシュ・インヴェイジョン	040
ウッドストック	082
ヒッピー・ムーヴメント	095
モータウン	123
ヴェトナム戦争	142
麻薬	210
ディスコ・ミュージック	222
アフリカン・アメリカン	258
ユーロ・ビート	304

かって言ってやりたい衝動に自分がいることに気付く。

「速達でーす!」も年に一度あるかないかの今の時代。それでも“速達”という手段はまだ残っているじゃないか、ねえ、この曲に登場する“誰かさん(=主人公の恋人)”と、彼に言ってやりたい。



c o l u m n
◀ 1960s ▶

キリスト教と聖書

カソリック、ギリシャ正教、プロテスタント(ルター派、メソヂスト、バプティスト)など、仏教同様、様々な宗派がある世界三大宗教のひとつ。本書で採り上げた洋楽ナンバーに関して言えば、英米主体ということもあり、プロテスタント系が多いといえる。

ゴスペル音楽というジャンルがあるが、その歌詞の内容は『聖書』とりわけ福音書(Gospel)の場面に典拠を求めたものが大半である。R&B シンガーには前身がゴスペル・シンガーで、教会の聖歌隊で喉を鍛えたのちプロのシンガーとしてデビューした人も数多い。

今から約20年前に日本で一時的なゴスペル・ブームがあった。銀座の某宝飾店前に設置されたクリスマス・ツリーの前で日本人の聖歌隊が讃美歌を歌った、という記事を当時読んだ記憶がある。讃美歌の歌詞の全ては『聖書』に基づいており、その背景は時に『旧約聖書』、時に『新約聖書』である。

また、非ゴスペル・ナンバーにも『聖書』の一節からインスパイアされた歌詞が登場することがあり、英米のクリスチャンにとって『聖書』がいかに身近な存在かが判る。

★ 関連曲→ 1957 You Send Me / 1961 Stand By Me / 1963 The End Of The World / 1966 A Hazy Shade Of Winter / 1967 Light My Fire / 1968 The Time Of The Season / 1969 In The Year 2525 / 1970 (They Long To Be) Close To You / 1971 Baba O'Riley / 1978 Y.M.C.A.

1 9 6 1

全米 No.4 / 全英 No.1

BEN E. KING
STAND BY ME



Stand By Me

スタンド・バイ・ミー

Ben E. King

ベン・E・キング

1938-

エピソード

ここ日本でも未だに人気不衰の曲で、CMソングにもカバーを含めて頻繁に使われている。また、アメリカの人気作家ステイヴン・キングの中編小説『THE BODY』(1982)をベースにした映画『STAND BY ME』(1986)の主題歌になったことから、同映画の大ヒットと共に曲もリヴァイヴアル・ヒットし、1986年に全米 No.9 を記録。なお、再レコーディングではなく、オリジナル・ヴァージョンと同じものが改めてシングル化されてヒットした。

1950年代後期～1960年代に人気を博したR&Bヴォーカル・グループのドリフターズに1959年からわずか1年間だけ籍を置き、後にソロ・シンガーに転向したベン・E・キングの最大のヒット曲で、R&Bチャートでは4週間にわたってNo.1の座に就いた。もともとはドリフターズのために書き下ろしたものだったが、彼らがレコーディングを拒否したため、ベン自身が歌うことに。一聴するとラブ・ソングに聞こえることから、英語圏では結婚式に歌われることも多い。が、アフリカン・アメリカンの人々が「我々にも公平な権利を」と訴えたいいわゆる公民権運動の萌芽を感じさせる1961年という時代を考えれば、この曲がある種のメッセージ・ソングとして捉えられたおかげでヒットしたこと

も見逃せない事実。さらには、曲の成り立ちには、ある有名なゴスペル・ソングが深く関わっていたのだった。

ストーリー

誰しも、言いようのない不安に駆られて心細い気持ちになることがある。そんな時、ひとりでも自分の支えになってくれる相手がいれば、弱気な気持ちを奮い立たせることができるもの。自分を取り囲む世界がガラガラと音を立てて崩れるようなことがあっても、救いの手を差し伸べてくれる誰かがいてくれる限り、へこたれたり泣いたりしてなんかいられない。自分の支えになってくれる人の優しさを心張棒にして、何とか前を向いて生きていこう。

Stand By Me の

キーワード & フレーズ

- (a) the land
- (b) stand by me
- (c) shed a tear

「ダーリン」。昔から愛しい人を指すカタカナ語として用いられてきた。では、この曲では誰を指すのか。単純に考えれば、曲の主人公の側に寄り添ってくれる愛しい人だ。が、じつはここでくり返し歌われる“darlin’（本来は darling）”は、一種のオブラートの効果となっている。何故か。

じつはこの曲には、元歌がある。「ゴスペル音楽界のキング」、若かりし頃は「ゴスペル音楽界の皇太子」という御大層な異名をとった、アメリカの超有名牧師ジェームス・クリーヴランドが作ったゴスペル・ナンバー「Oh Lord, Stand By Me」である。シカゴを拠点に活動したクリーヴランド師は、高名な牧師として、そしてゴスペル界の重鎮として知られた人物。元歌となった同曲の歌詞

はネットで検索可能だ。そう、この曲は、もともとはゴスペル・ナンバーだったのである。ベン自身もそのことを否定していないから、今さら隠すことは何ひとつないというわけだ。タイトルからゴスペル・ナンバーを瞬時に想起させる「Oh Lord」を取っ払い、さらに歌詞にラヴ・ソング風の味付けをした。それが、オブラートの効果と言った“darlin’”の部分。

英語では、ゴスペル音楽を俗に“God’s Music（神様を称える音楽）”と呼び、非ゴスペル音楽、日常生活の出来事を歌った流行歌の類を、それと相反するものとして“Secular Music（世俗の音楽）”と呼ぶ。熱心なクリスチャンや教会関係者の中には“Devil’s Music（悪魔の音楽）”とキツイ言葉で呼ぶ人も。つまりベンは、神様を称える曲を悪魔の音楽にすり替えてしまったのだ。“darlin’”のフレーズを付け加えて歌った瞬間に。

試しに、「Stand By Me」の“you”の部分を“God”や“Jesus”“Lord”に置き換えてみると——その際、歌詞から“darlin’”をひとつ残らず削除することも忘れずに——あら不思議、そのままゴスペル・ナンバーとして通ってしまう。そしてこれこそが、ベンの狙いだったのだと思う。

クリスチャン以外の人々にも聴いてもらうために、主語をボカして綴られた歌詞や洗練されたサウンドをあえて施したものを、俗に“Contemporary Gospel（現代的なゴスペル）”と呼ぶ。もしもこの曲に“darlin’”のくり返し部分がなかったなら、間違いなくそのジャンルに含まれていたことだろう。ただし“Contemporary Gospel”なるジャンル名はそう古くはなく、この曲が大ヒットしていた頃には、まだその名称が存在していなかった。何せ当時は、レイ・チャールズがゴスペル風のサウンドを従えてR&Bを歌った*1だけで、教会関係者たちに「地獄へ落ちろ！」

★1—その時、“ソウル・ミュージック”が誕生したと言われている

Smoke On The Water

スモーク・オン・ザ・ウォーター



Deep Purple
ディープ・パープル

1968-1976, 1986-

エピソード

イギリスが生んだ最高峰のロック・バンドのひとつ、ディープ・パープルの最大ヒット・アルバム『MACHINE HEAD^{*61}』からのシングル・カット曲で、メンバー・チェンジ前の大ヒット曲「Hush^{*62}」以来、5年ぶりに全米チャートのトップ5圏内に入る大ヒット曲となり、ゴールド・ディスク認定となった。当時の——そして恐らく今も——ギター少年たちは、必ずと言っていいほどこの曲のイントロ部分の印象的なギターのリフを真似したものである。

実況中継のようなこの曲の背景は有名で、実際に起きた事件が歌詞にそのまま綴られている。1971年12月4日、ディープ・パープルはスイスにあるモントルー・カジノ^{*63}の一角で新譜をレコーディングするはずであった。ところが、前日の12月3日、フランク・ザッパが同会場でライブを行っている最中に、彼らの偏執的ファンが隠し持っていた信号拳銃を建物の天井に向けて発砲し、瞬間に火が燃え広がってカジノが全焼する大惨事へと発展。レコーディング先を失ってしまったディープ・パープルは、そのせいで他の場所を探さなければならなくなった。ローリング・ストーンズがレコーディングに用いていたことで知られる移動式スタジオ^{*64}を借り、モントルー郊外にある古びたホテルで『MACHINE HEAD』のレコーディングを行わざるを得なかった、というエピソードは、広く人口に膾炙している。

ストーリー

翌日に俺たちがレコーディング場所として使用するはずだった、レマン湖畔にあるカジノで、フランク・ザッパの演奏中に火事が起き、建物が全焼してしまった。火柱が空に向かって高く立ち上り、レマン湖の水面の上を煙が漂って^{*65}、会場は大パニック。カジノは爆音を立てながら崩れ落ちてしまった。俺たちがスイスに滞在している日数もあとわずかか。早いとこ違うレコーディング先を探さなければりやならない。ようやく探し当てた空室だらけのホテルで、苦肉の策で部屋や壁にベッドのマットを立て掛けて防音装置代わりにし、無事にレコーディングをやり遂げることができたわけさ。それにしても、カジノでのあの出来事は決して忘れないだろうな。

Smoke On The Water の

キーワード & フレーズ

- (a) a mobile
- (b) be at the best place around
- (c) the Rolling truck Stones

これももしメロディを持つ楽曲でなかったなら、歌詞はあたかもモントルーのカジノのライブ会場で起きた火事の様子を伝えるニュースのようである。ところどころ、動詞が現在形になっていることも、この曲が実況中継のように聞こえる要因のひとつだ。しかしながら、怪我の功名とも言えばいいの、もしもフランク・ザッパのライブ中に火災が起こらなかったなら、ディープ・パープルの代表曲中の代表曲であり、ロック・ミュージック史上に半永久的にその名を深く刻むであろうこの名曲は決して生まれ得なかったのである。何とも不思議な運命の巡り合わせとしか言いようがない。蛇足ながら、フランク・ザッパは、その火事で、(当時の価値で)約5万ドル分の楽器や機材が焼失

^{*}61 — 1972 / 通算6枚目のスタジオ録音アルバム / 全英アルバム・チャート No.1, 全米 No.7

^{*}62 — 1968 / 全米 No.4, 全英チャートでは何故か振るわず、No.62 止まり

^{*}63 — 現在もそこでモントルー・ジャズ・フェスティバルが開催されている

^{*}64 — レコーディング機材を搭載したコンテナを積んだ車

^{*}65 — the water = Lake Geneva or Lake Lemana

してしまうという憂き目に遭った。レコーディング先を失ってしまったディーブ・パープルも気の毒だが、フランク・ザッパにも同情を禁じ得ない。

携帯電話やスマートフォンが普及した今でこそ、日本人にも(a)はカタカナ語の「モバイル」で通じるが、“mobile”は形容詞では「可動式の、移動可能な、車に取り付けた」という意味で、名詞では「可動装置」他に「動く彫刻」などという想像を絶するような意味もある。今ではカタカナ語でもすっかりお馴染みのその単語を、この曲がヒットしていた1973年当時、いったいどれほどの人々が理解し得ただろうか。曲の冒頭に出てくる(a)には不定冠詞の“a”が付いているが、曲を聴き進むうちに、実はそれが(c)を指していることに気付く。

(b)は、曲の中では主語が“Frank Zappa and the Mothers^{*66}”になっており、直訳すると「フランク・ザッパ&マザーズは(カジノ周辺にあるライブ会場)一番いい場所で演奏していた」となるが、これは大いなる誤訳。“place”には、「音楽の一節」という意味もあり、つまり、同フレーズは、「フランク・ザッパのライブで曲が最高潮に盛り上がっていた」という意味なのである。そしてその盛り上がりの最中に、あの惨事が起きてしまった。“place”には「場所」以外にも多くの意味があるので、これを機に、今一度、辞書で調べてみては如何でしょうか。

ディーブ・パープルによる造語とも言うべき(c)は、彼らのファンやロック愛好家の間では、昔から“The Rolling Stones Mobile Studio”と呼ばれてきた。カジノでの惨事を予想していたわけではないだろうが、ディーブ・パープルは、レコーディングのために事前にローリング・ストーンズから移動式スタジオを借りていたのである。そのことへの感謝も込めてこの曲の歌詞に登場させたかったのだろうが、“The Rolling Stones

★66—the Mothersはフランク・ザッパと共にレコーディングしたりライブ活動をしたりしていたバンド

★67—このアルバムを、心からの感謝を込めて彼に捧げる

Mobile Studio”では、歌詞に組み込むのには長過ぎたのか、知恵を絞って彼らなりの造語の(c)を考え出して歌詞に綴ったのだろう。“truck”には「運搬車」以外に「移動台」という意味もあり、造語の(c)を意識するなら、「ローリング・ストーンズ愛用の移動式レコーディング機材(を搭載した車)」となるだろうか。

モントルー・ジャズ・フェスティバルの創設者のひとりであり、この曲の歌詞にもその名が登場する“ファンキー・クロード(Funky Claude)”ことクロード・ノブス氏は、目下、同フェスティバルの総括管理者も務めている。この曲が生まれるきっかけとなったあの火災が起こった際、ひとりの死者も負傷者も出さずに観客たちを避難させたのは彼だった。そのことへの感謝を込めて、ディーブ・パープルは、『MACHINE HEAD』のLPのダブル・ジャケットに彼の写真を名前入りで掲載し、“To him, this album is gratefully dedicated^{*67}.”と記している。予期せぬ惨事から生み出されたこの名曲の真の陰の功労者は、実はノブス氏だったのかも知れない。

167

全米 No.1 / 全英 No.31



The Way We Were

追憶

Barbra Streisand
バーブラ・ストライサンド

1942-

エピソード

この曲は、シドニー・ポラック監督、バーブラ・ストライサンドとロバート・レッドフォードが主演した大ヒット映画『THE WAY WE WERE (邦題:追憶)』のテーマ曲である。歌詞の内容は、物語の行方を暗示している。相反する政治思想を持ちながらも、どこか